

令和 2 年 6 月 7 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02618

研究課題名（和文）チリのポスト軍政期文学の挑戦：スリータとエルティッツの文学に関する総合的研究

研究課題名（英文）A challenge of the post-military administration period literature of Chile: General study on literature of Raúl Zurita and Diamela Eltit

研究代表者

松本 健二（Matsumoto, Kenji）

大阪大学・言語文化研究科（言語社会専攻、日本語・日本文化専攻）・准教授

研究者番号：00283838

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：1973年に始まったチリの軍事独裁政権下で、亡命をせずチリ国内で文学の創作を続けたラウル・スリータとディアメラ・エルティッツは、様々な人権侵害や政治的抑圧の記憶を鎮魂という形で詩に昇華し（スリータ）、また新自由主義経済のモデル国家として急速に監視社会化が進行する中で周縁化した首都サンティアゴ貧困層等の社会的弱者にフォーカスする前衛的作品等を通じて（エルティッツ）、1989年の民政移管後にチリ社会で進んだ真相究明と和解のプロセスにおいて、文学表現の現場から一定の影響力を果たしてきたことを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はチリの作家二人のスペイン語テキスト読解が主目的であったが、研究代表者は2019年9月にサンティアゴ市内の軍事政権下の様々な人権侵害の痕跡を回顧する「歴史遺構」と訪問し、サンティアゴ中央墓苑の犠牲者鎮魂碑に刻まれたスリータの詩を確認した。こうした作業を通して、チリのポスト軍政期における現実の鎮魂メカニズムと二人の作家の文学的創作プロセスとの関係性、類似点等を明らかにすることができた。実社会における記憶表象の形成に同時代の文学がどのような関係性を結ぶか、これはチリに留まらず、様々な天災、人災の「その後」を生きる人類に普遍の問題であるといえよう。

研究成果の概要（英文）：The Chilean poet Raúl Zurita and the novelist Diamela Eltit, under the Chilean military regime that began in 1973, continued their creative activities in Chile without going into exile. Zurita sublimated memory of various human rights violations and the political suppression into poetry in the form called requiem, and Eltit, through her avant-garde works, focused on the socially disadvantaged such as the poor of the capital city Santiago, who was marginalized while the surveillance socialization was being progressed rapidly in Chile as a model nation of the neoliberalism economy. I have clarified the two writers had a constant influence in the field of literature expression in the process of investigating the truth and reaching reconciliation, which was advanced after the civilianization in 1989.

研究分野：スペイン語現代文学

キーワード：ラテンアメリカ文学 チリ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は長年ペルーの詩人セサル・バジェホの研究を続けてきて、2015年には翻訳『セサル・バジェホ全詩集』(現代企画室)を刊行し、また2019年にはこの翻訳に基づく研究発表“*Algunos rasgos característicos de la versión japonesa de Los heraldos negros.*”(『黒衣の死者ども』日本語版の諸特徴)をペルー国立サンマルコス大で行なうなどスペイン語詩研究において一定の成果を上げている。さらに2015年度から2017年度までに実施した科研「チリにおける反詩の系譜：ニカノール・パラとエンリケ・リンの文学に関する総合的研究」(課題番号26370386)では主として1960年代に活躍した二人の前衛詩人の研究を行ない、またその過程でチリを代表する詩人パブロ・ネルーダの代表作『大なる歌』(現代企画室)を翻訳するなど、チリ現代詩に関しても研究活動を展開してきた。いっぽう2010年頃からチリの作家ロベルト・ボラーニョやアレハンドロ・サンブラらの翻訳も手がけ、上記科研を進行させるあいだにチリの現代史を画する大事件、すなわち1973年9月11日の軍事クーデターとそれから16年間続いた軍事独裁政権とチリ文学との関係性に研究対象を移行させてゆくこととなった。

独裁政権下のチリ文学に関する国内外の研究においては、ボラーニョなど亡命作家を中心に数多くの分析がなされてきたが、ラウル・スリータやディアメラ・エルティッツなどチリに留まり検閲下で創作を続け、1989年の民政移管後の民主化プロセスにも深くかかわる文学活動を展開してきた作家に関する研究は、チリ本国や米国における中南米研究に特化した一部大学などで提出されている博士論文などに限られ、いまだ進展途上にあることがわかってきた。

2. 研究の目的

本研究は、チリのピノチェト軍事政権時代後期(1970年代後半)から民政移管後の数年(1990年代)に及びいわゆる《ポスト軍政期時代》に極めて独創的な文学活動を展開したチリ人作家ラウル・スリータとディアメラ・エルティッツの作品研究を中心に、検閲が横行していたこの時代の文学者たちが伝統的な文学表現の方式から意図的に逸脱し表現媒介を活字以外の様々な次元に求めることで取り組んだ《記憶の形象化》という大胆な詩的挑戦の足跡と、数々の人権侵害を生んだ紛争の未来における和解プロセスの進展をにらんだ《社会的パフォーマンス》としての文学活動の実態を明らかにし、軍事政権期という困難な時代の歴史的総括において文学等の表現行為がどのような社会的機能を担い得たのかを究明する。

3. 研究の方法

本研究は《チリのポスト軍政期における文学者の挑戦》の実態を究明することをその主要目的としており、具体的には次の3つのプロセスに従って研究を進めることとした。1)ラウル・スリータの詩集『煉獄』『樂園前』における軍政期トラウマの形象化の検証と、空中詩等の非活字詩が果たした社会的意義の究明。2)ディアメラ・エルティッツの初期小説群における社会的弱者の表象に込められた社会的苦痛の形象化の検証と、写真本『魂梗塞』の成立における紛争和解プロセスとの関係の究明。3)上記2作家以外の1970年代以降のチリ現代文学のマップを作成する。方法は文献収集、読解、論文化等を中心とする。

4. 研究成果

(1)ラウル・スリータの文学

スリータは1979年エルティッツらと前衛芸術のグループCADA(芸術坑道集団)を結成、出版界や美術館といった公共的な表現空間を離れ、同年には「芸術で飢えて死なないために」と題する街頭パフォーマンスを展開、軍政下の一見すると秩序だった国民生活に潜む数々の矛盾や、新自由主義経済モデルが大々的に推し進められる中で進む貧困層の拡大等を訴える暴露的芸術を進化させた。続く1981年には「ああ南アメリカよ!」と題するパフォーマンスを実施、これはサンティアゴ上空にセスナ機を飛ばし、4万枚のアジ文書を市内に投下するというもので、投下された文書と飛行するセスナ機を映したインスタレーションが残されている。同時に第一詩集『煉獄』(1979年)を刊行するが、この詩集は様々に変容する一人称単数形の「詩的主体(詩における語り手に相当する)」を特徴とし、また表紙にはアンモニアを自らの頬にかけた際にできた傷跡の写真が使用されていた。自己イメージの偽造と自傷行為という、この詩集を特徴づけるこの二つの要素は、苦痛を受けている単独の《私》を集合的な《私たち》として昇華しようとする作者の意志を反映したものである。スリータには、パフォーマンスや詩作を通じて、抑圧下で沈黙していた一般市民との交感だけを目指していたのではなく、独裁政権下での生存者(スリータ自身はクーデター直後に3か月間バルパライソ沖の貨物船収容施設に拘留されている)としての自責の念から、自らの精神錯乱や自傷行為そのものをより公共的な詩的主体に仮託し、表現行為を通じて集団的な救済を目指す傾向があった。

1982年、スリータはエルティッツとニューヨークで12行の詩「新生」を3台のジェット機による煙で空に描き出すという、いわゆる空中詩のパフォーマンスを実行する。これは現在映像のインスタレーションとして見ることができるが、書物のなかの活字に封じ込められていた詩を一瞬して消滅する煙として開放し、その詩こに込められた鎮魂の願いを《刹那性》という新たな表現手段にのせる狙いがあったと考えられる。この12行詩は同じ1982年に刊行された大部の詩集『樂園前』にコラージュされ、このように非活字のパフォーマンスと活字詩のメッセージが融合されることで、詩という発信側においても受容側においてもきわめて個人的な営為が公共

性を帯び、その結果、人権侵害の記憶、犠牲者の鎮魂といった本来公共性を有するはずの現象と詩の言葉が共鳴し合うことになる。

詩集『樂園前』は、詩的主体が時として様々な人称に分裂し、また様々な他者の声と対峙することで、そこに構築された濃密な不安と恐怖の世界に読者を強い力で引きずり込もうとする。特定不可能な人物の声があらゆる角度から介入してくることで、読者はどこに軸足を置けばいいのかわからないまま、詩的主体を取り囲む白い迷宮のような虚構に囚われてしまう。いっぽう個々の詩にはまるで額縁で仕切られた絵画のようなレイアウトが施してあり、隣接する詩にも同様の構造が見られることから、個別の詩で定まりかけた意味形成のプロセスがその直後に崩壊したり、逆に個別の詩では明確にならなかったイメージ構造が直後の詩を経由することでくっきりと浮かび上がってくる。ページごとの自立性を高めるために特殊なレイアウトを施された詩を、単語間の余白によって示されたマーカーを意識しつつ音読してみると、そこでまた違うイメージが現れてくる。他のページで反復されているある詩の1行がそのページにある理由は何か、空中詩「新生」のある一行がそのページに引用されている理由は何か、まるで入り組んだ画廊をさまようようにして個々の詩句が形成・配置されている意味を思考する作業を繰り返すうちに、ついには読み手しかつくりえない独自の世界が立ち現れる。

スリータは詩集『新生』刊行の後、民政移管後を見据えた新たな創作スタイルを模索するようになるが、そのひとつの帰結が視覚詩『その消え失せた愛に寄せる歌』(1985年)である。後の1994年に刊行される500ページを超す後期の代表作『新生』の一部をなすことになるこのわずか27ページの詩集は、スリータ文学の中核にある《死者の鎮魂》というテーマが凝縮された構成となっている。この詩集に垣間見えるある種の汎アメリカ大陸主義や、死者に語らせるという手法そのものは、すでにネルーダが『大なる歌』で示したそれに重なるものであったが、スリータの詩にはネルーダの作品が有していたような社会主義的な発展史観はなく、その作品世界の特質はしばしば指摘されるように「終末論的 (escatológico)」なる表現が的確に示しているともいえるが、ここで振り返るべきは、1973年9月11日のクーデターから一か月もたないうちに起きたネルーダの象徴的な死の「後」を生きてきたチリ人にとって、社会正義の実現とはなんらかの歴史観に基づいて未来にもたらされるものではなく、とりあえず直近の過去に起きた、あるいはいまなお起きている忌まわしい暴力を伴う出来事の意味付け、すなわちある種の《鎮魂》に傾きがちであったことであり、ポスト軍政期にスリータの詩が必要とされた理由もそこにあるといえよう。

詩集『その消え失せた愛に寄せる歌』の構造は、実は2010年にバチエレ政権によってサンティアゴ市内に建造された軍事政権時の記憶を展示する「記憶と人権博物館」の全体的な展示構造レイアウトに奇妙なほど類似している。研究代表者は2019年9月11日の前後にサンティアゴ市を訪問し、この博物館や市内に点在する軍事政権時代の歴史遺構を見学することで、スリータの文学作品がチリでどのように読まれ、共感されているかを確認してきた。一時的な政治犯収容所となった「国立スタジアム歴史遺構」にはスリータの詩にも現れる数多くの《犠牲者の声》が氏名と日付と写真入りで掲示されている。秘密警察 DINA の基地で軍による拷問と殺害の現場となっていた「旧グリマルディ邸歴史遺構」には、目隠しをされ梱包された末にヘリで海洋に投棄された人々を回顧する展示があり、スリータが『樂園前』などで表現してみせた恐怖表象の生成プロセスを知ることができた。サンティアゴ市中央墓苑の中心にはおよそ4000名の犠牲者、失踪者を鎮魂する巨大な石碑があり、いまなお毎年9月11日には歴史記憶の領有をめぐる論争の象徴的闘争の場として注目されるが、この石碑の上部には上述したスリータの「その消え失せた愛に寄せる歌」の一節が大きく刻まれている。チリでは、軍政時代の歴史記憶の改ざん、もしくは忘却に類する発言を政治家などが行なった場合、今なお市民による大々的なデモが勃発するが、スリータはそのような場でも自作詩を朗読し、公器としての詩人という、ネルーダ以降のチリで脈々と受け継がれてきた文学者の役割を果たし続けていることも明らかになった。

(2)ディアメラ・エルティッツの文学

エルティッツはスリータと同じく芸術家集団 CADA における街頭パフォーマンスから創作を開始するが、1980年代以降は主たる表現手段を小説やエッセイ、さらには写真や映像等の非文字媒体との共同制作へと転じてゆく。難解で、終始一貫した物語を観測すらしがたいその前衛的小説のスタイルは前衛小説『ルンペリカ』(1983年)をはじめとする初期四作品、いずれも軍政末期に書かれた作品群で形成されたものである。本研究においては、研究期間の関係上、チリや米国における主要先行研究でもっとも数多く分析の対象となってきた小説『ルンペリカ』に焦点を絞り、読解を試みることにした。

小説『ルンペリカ』(題は造語で、ルンペン、アメリカ、スペイン語で「裕福な」という意味を示す形容詞リカ、チリ方言で娼婦を示すペリカ等、様々な解釈がなされる)には明確なプロットは存在せず、舞台はサンティアゴのどこかの広場、ネオンサインの広告塔に照らされた夜間、その広場に現れたひとりの女性が自慰行為や自傷行為を繰り返し、周囲を男性の浮浪者数人が取り囲んでいるという《シチュエーション》だけで進行する。時間を追って進むプロットは一切存在せず、一定の語り手も存在しないのだが、こうした難解さ、抽象性は、刊行当時のチリで検閲があったことと深く関係している。いっぽう、造形芸術家として出発したエルティッツが書いたこの小説は、読み手の情動を喚起することをその目的にはしておらず、むしろ読み手の側の能動的で批判的な解釈行為を要求する、いわばある種の開かれた《概念小説》なのであり、こうし

た小説をめぐる議論は、プロットや人物の描かれ方といった伝統的小説の読解において分析対象となる要素ではなく、その構造や文体が意図しているもの、もしくは意図的に隠ぺいしたものを思考するものでなければならない。

作品が刊行された時期サンティアゴでは夜間外出禁止令が常態化していたことを考えれば、女性の主人公 L. iluminada が公共の広場にしかも半裸でいること自体が権力に対する挑発行為となる。ここで描かれているのは独裁体制下での《眼差し》をめぐる闘争であり、彼女が抗っているのは、たとえば警察による尋問の場面に見られる監視体制という名の眼差し、ネオンサインという資本主義体制を象徴する照明による眼差し、そして男性放浪者たちや読者も含むポルノ鑑賞者の眼差しでもある。この小説では主人公の女性がこうした眼差しの暴力に抗い、徐々に一個の主体性を取り戻してゆくプロセスが描かれている。

エルティッツは、独裁下のチリを舞台に、一貫して、疎外された様々な社会的弱者をテキストに取り込むことを目指してきた。その代表である『ルンペリカ』の主人公のような《周縁的》人物表象は、民政移管直前の 1989 年に CADA 時代の盟友で写真家のロティ・ローゼンフェルドとサンティアゴ市内に住む統合失調症患者を取材した際の録音記録を文字に起こした作品『わが父』、あるいは民政移管後の 1995 年に写真家のパス・エラスリスと知的障害者施設に暮らす夫婦や恋人たちを記録した写真本『魂の梗塞』等においても依然としてエルティッツの文学的関心の中心的対象である。このような伝統的な小説作法からはかけ離れた表現行為を見てゆくと、エルティッツがたとえば L. iluminada に象徴されるような、監視・消費・性といった様々な《抑圧的欲望の眼差し》の対象とされるような、たとえば娼婦やストリッパーのような存在や、あるいは小説『祖国のために』(1986 年)の主人公コヤの家族が置かれた社会構造上の周縁部、すなわちサンティアゴの貧困層のみならず、利潤を生みだす労働という、いわば新自由主義経済体制下における正しい人間の活動にはなんら寄与することのない人々、病気や狂気のレッテルを貼られ、権力と資本が公認するいわば《現代社会のインサイダーの世界》の外にいる存在に徹底してこだわり続け、彼らをいかにして文学作品に取り込もうとしているかがわかる。エルティッツが文学表現を通じて目指している社会的包摂の対象とは、軍事政権下、あるいはその時期にほぼ完成したチリの新自由主義体制下において市民としての政治・経済的主体性を著しく希薄化された人々、チリの《いま》をその周縁部や最底辺で生きる市民たちであるといえよう。

(3)チリ現代文学マップの作成に向けて

本研究は、目指した 3 つのプロセスのうち、2 のエルティッツ作品の読解、および 3 のチリ現代文学マップの作成については、予定していたほど充実した成果は収められなかった。しかしながら、エルティッツ文学に関する資料集積は完了しており、その読解は今後も引き続き実行する予定である。また、チリ現代文学の情報収集に関しては、現在チリの最若手作家で 1981 年生まれの作家パウリナ・フローレスの短篇集『恥さらし』を翻訳中であるが、民政移管後に生まれた作家たちが独裁時代をどのように受け止めているのかも含めて、本研究期間中に集めた資料を読んでいく作業を今後も続ける予定である。

また、サンティアゴ市で記憶遺構を訪問して文学作品との影響関係を考察していくなかで、チリのみならず直近の過去になんらかの重大な災厄を体験した地域で、その災厄を総括するプロセスに移行した際に形成される様々な合意、あるいは「真相究明と和解委員会」による報告書などの公文書、あるいはその後に進む歴史記憶領有をめぐる争い(歴史修正主義の跋扈やそれに対するけん制の言説等)等と文学言説がどのような関係を取り結んできたかに関心を抱くようになり、その結果、2020 年度からは、チリのポスト軍政期文学とあわせて、内戦と独裁を経た現代スペイン文学、テロと暴力の時代を経たペルー文学における記憶表象の問題を、科研「現代スペイン語小説における記憶の回復：スペインとチリとペルーの紛争後文学の研究」(課題番号 20K00470)において継続して進行中である。

なんらかの災厄を体験した地域の文学表象が、実社会における記憶・歴史形成プロセスの運動のなかであってどのような役割を果たしてきたのかを考えていくことは、スペイン語圏のみならず、たとえば我が国における戦争記憶をめぐる文学的表象の問題とも重なり合い、今後の世界における重要な文学的思考の共通テーマとなっていくことは間違いないと思われる。チリのポスト軍政期文学という局所的な事象の研究を通じて、このテーマの普遍性を認識できたことは本研究における最大の成果であったといってもいいだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松本健二	4. 巻 43
2. 論文標題 トラウマ的記憶を詩にする困難 ラウル・スリータ 『その消えさせた愛に寄せる歌』に関する考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Estudios Hispánicos	6. 最初と最後の頁 57-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本健二	4. 巻 42
2. 論文標題 乱反射する苦痛と希望 ラウル・スリータ 『楽園前』に関する考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Estudios Hispánicos	6. 最初と最後の頁 51-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本健二	4. 巻 44
2. 論文標題 チリのポスト軍政期文学における社会的包摂 エルティツとスリータの研究に関するメモ書き	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Estudios Hispánicos	6. 最初と最後の頁 59-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松本健二
2. 発表標題 ラウル・スリータ 『かの消えさせた愛に寄せるカント』 『チリの愛』の位置づけをめぐって
3. 学会等名 東京スペイン語文学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松本健二
2. 発表標題 ラウル・スリータ『楽園前』におけるチリ表象
3. 学会等名 東京スペイン語文学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松本健二
2. 発表標題 戦いの場としての公共空間 ディアメラ・エルティッツの概念小説『ルンペリカ』について
3. 学会等名 東京スペイン語文学研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----